

### 「雨1」

黒い夜空から降り注ぐ雨がコンクリートを濡らしていく、  
降り落ちた雨は地表から高く跳ね返り先鋭なかたちがここそこで生まれては消える、  
消えては一つのかたちとなり、  
ただ冷たいグレーの排水路を流れていくのであっても、  
それでもかたちとなりある一方へ流れていく、  
その流れの中にあることは安全で安心である

### 「雨2」

どの瞬間にもヴェールがかかる、  
見える景色は透明で私も透明である

入念に手入れされた花壇に咲き誇る真夏の花は簡単にパチリと生命を断ち切れ墓前に捧げられる、こ  
こは母の王国であり私は客人であり、私は母を見る

夜が空を浸し始め黄昏が青草に沈む  
彼方へ昇る神楽の舞も終わり、子供であることも時間切れとなる

土と畳と雨の匂いだけが時を浸してゆく真夜中に身動きは取らず  
母の帰りを待ち続けている

### 「雨3」

夏の夜、カーテンは呼吸する、  
間合いから差し込む一瞬のフロントライトが天井に作る世界

愛は等しく私に隣人に、物質に内包されている  
私たちが深く地底に眠っていた頃から目覚めた今も

### 「夏1」

雲の口からバラバラと言葉がこぼれ落ちる  
夕刻、街がオレンジ色に灯る前に  
風は幾多の樹木を揺らし続けてきた  
私たちだってそれを知っている  
調和、私のあなたの驚きはいつもこの道の見えない程遠くにあり行間に足を取られ歩いていて突然世界  
は「アッ」と幕を閉じるのではないかと傾げ続け増幅し続けている心はこの調和の中で隠れてしまった

「夏2」

終わりあることを引き延ばそうとはしないが  
ここは私たちの唯一の水飲み場であり  
オリンピックの夜の冷たい枕の匂い  
私たちはもう少しここに隠れている

「夏3」

柔らかいボールが段々と弾んで少女の手の中へ帰る  
白色のネオンに輝く彼女はいつも目の前のものを見ようとしない

夜に鳴る風鈴の音を聴いて庭木の一葉が舞い降りる  
家族の契約は真夜中に交わされる

夜のあちらこちらからオレンジ色のまぼろしが子供たちを掴み取り此岸と彼岸の淵へ  
そっと置き去る

「夏4」

放埒な感情一つ一つすべての痕跡である真夏のサンダルを履いているひとは  
紫色の煙が朝靄に混ざり合いゼラニウムが香り立つ頃、あたらしさの射程に折り重なる

私たちがそのまま真昼に出会うならば  
私の頭からあなたの頭から大聖堂の鐘の音が鳴りわたる

「夏5」

滞留する円形の摩天楼の上で薄紙一枚の距離に近付いた私とあなたの体について  
私が憂鬱の手を差し伸べればあなたの体は私が差し出した分だけの曲線を描く

「夏6」

いかなるかたちをあてがうこともできない事柄が誰にでもひとつやふたつある  
完膚なきまでまとわりつく季節に相応の孤独と悲しみがある  
青天を突き刺すゴシックの尖塔でさえなお滴る程豊潤な未練と共に生きていることを知る

「(無題)」

彼女は大地と歌である、生命  
ただ在る、ただ生きる  
理念はない、それゆえ遅滞はない  
在るために在る日、生きるために生きる日

林 キナリ